



# 父と暮せば

作 井上ひさし (新潮社刊)  
演出 木村 繁



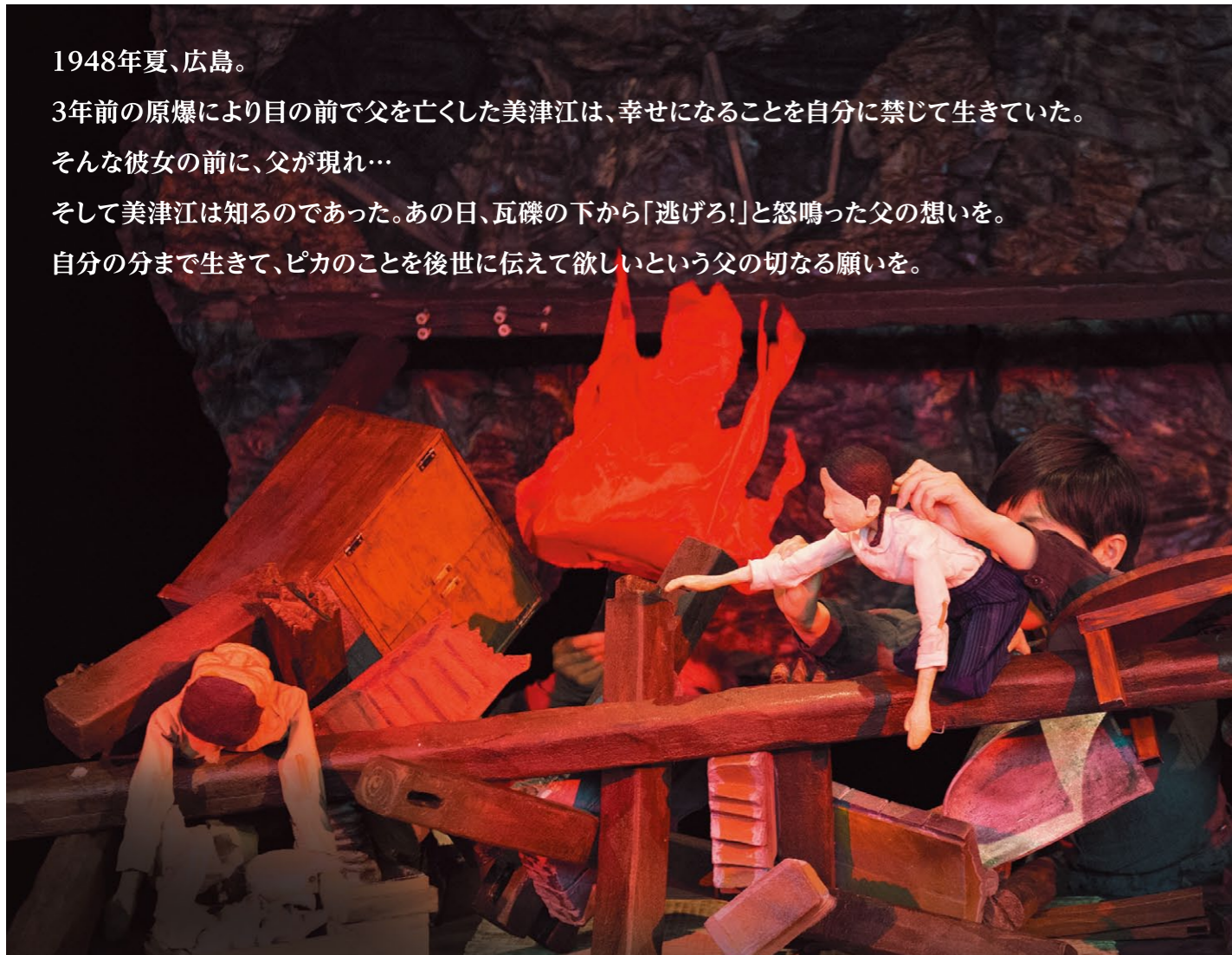
1948年夏、広島。

3年前の原爆により目の前で父を亡くした美津江は、幸せになることを自分に禁じて生きていた。

そんな彼女の前に、父が現れ…

そして美津江は知るのであった。あの日、瓦礫の下から「逃げろ!」と怒鳴った父の想いを。

自分の分まで生きて、ピカのことを後世に伝えて欲しいという父の切なる願いを。



◎スタッフ

企画 / 浦野一昭

演出 / 木村 繁

美術 / 宮武史郎

音響 / 加藤久直

照明 / 林 達美

衣裳 / 福永朝子

宣伝美術 / 杉江智子  
(デザインキッズ)

写真 / 清水ジロー  
(写真映像工房サラ)

制作 / 吉田明子

一瞬のうちに人の世のすべてがのうなっていました。

あんときの広島では死ぬるんが自然で、  
生きのこるんが不自然なことやったんじゃ。

## 人形劇と井上戯曲

演出 / 木村 繁

1985年～2013年、人形劇団むすび座に所属。『雪をんな』脚本、『ツメをなくした鬼』脚本演出、『わわしい女』脚本等を担当する。

2013年に退団後、フリーの演出家として多くの劇団、財団で演出にあたる。文化庁舞台芸術奨励賞佳作、名古屋市芸術奨励賞ほか受賞。一般社団法人日本演出者協会理事。

「父と暮せば」は井上ひさしさんの異色の喜劇です。結婚をあきらめた被爆者の娘に恋をさせるために、亡き父があの世界から肩を押しにやってくるのです。昔から喜劇にはお節介のおっちょこちょいが登場して、恋の手助けをして失敗したりしますが、井上さんはこの喜劇の手法を使って、シリアスな原爆ドラマを笑いと涙の渦に仕立てました。多くの劇作家が原爆に纏わる戯曲を書きましたが、喜劇として成立させたのはこの戯曲一本です。むずかしい命をかけたお仕事だと思います。

この戯曲は、人形劇にし難いセリフ劇ですが、人形劇が好きだった井上さんは劇中に“エブロン劇場”(人形劇の一種)を書き込んでいます。又、父は死者ですから、神出鬼没、天井裏や茶ダンスから登場したりもするでしょう。風に吹かれて身体もバラバラになり、霧のように消えさりもしましょう。そんな命のない者に命を与え活躍させるのは人形遣いの腕次第です。

私は演出に当たり、父と娘の役を、人形遣いと語り手に分離しました。分離することにより、又、時にはその役割を交換する事により、新しい人形劇の可能性を生みだしたい、戯曲の喜劇性をより鮮明にしたいと目論みました。「父と暮せば」の人形劇版は本作が第一号のようです。この作品を全国のむすび座ファンはもちろん、今まで人形劇と出会ったことのない人々に向けて発信します。

● 安住恭子 (演劇評論家)

中日新聞夕刊(2015年9月15日発行)

名古屋の人形劇団むすび座が井上ひさしの名作「父と暮せば」を人形劇に仕立てた。井上のせりふを生かそうと操り手と語り手を分離したことで、人形劇と語り劇が絡む重層的舞台となった。(中略)

その結果、井上が描いたテーマが確かに伝わってきた。それは、「生き残ることが不自然」な中で生き残り、幸せになってはいけないと思込む広島での生存者たちへのメッセージだ。死者の分まで幸せに生きよ。そして、あの過酷な体験をしっかりと後世に伝えよ、と。

● ホ・スンジャ (演劇評論家、ソウル芸術大学教授)

「韓国演劇」2014年9月号

国内外によく知られたむすび座の完成度の高い公演は、井上ひさしの原作にまた別の生命を吹き込み、それはまさに人形劇だからこそ可能な感動の世界であった。

公演の間中、俳優と人形遣い達は観客に自らの姿をそのままにさらけ出し、役の分離と結合、あるいは再結合という力学の原理で驚く調和を舞台で見せた。この公演は美学的な根幹に文楽の礎を置くと同時に、その伝統に反旗を翻す新たな形式を創りあげた。(一部抜粋)



人間のかなしかったこと、たのしかったこと、  
それを伝えるんがおまいの仕事じゃろうが。





